

2074 年を想い、行動する

工藤律子 (ジャーナリスト)

スペインで地域の生ごみから堆肥を作り、それを使って農地を再生、有機野菜を育てるなどの環境活動を行う市民グループの活動家が、来日した。彼は、日本でその活動を紹介する講演で、こんな話をした。「活動に参加する子どもやおとな、皆にいつもひとつの問いかけをしています。“あなたは、自分の暮らす地域が 2074 年にどんなところであってほしいですか？”と」

この問いかけは、私たち一人ひとりの日々の行動が、50 年後、100 年、200 年後の未来を決定しているということを意識させるためのものだ。

日本に暮らす私たちは、戦後の経済成長を目標とする時代から続く競争社会が作った制度や常識に、様々な面で縛られてきた。その結果、「自分のことで精一杯」、「まずは目の前のことをうまくこなす」というメンタリティで生きている人が多いのではないだろうか。そうした生き方の積み重ねが、近年の「異常気象」や「子どもの貧困」などにつながっていると仮に気づいていても、「だから、これからはもっと長いスパンで世界の未来を見つめ、生き方を見直していこう」とは、なかなかならない。しかし、それで本当にいいのか？ スペインの活動家は、そう疑問を投げかけているのだ。

ところで私は 1993 年から、本業のかたわら、仲間と「ストリートチルドレンを考える会」という NGO をボランティアで運営してきた。大きなことはできないが、子どもたちの現実を見つめ続け、彼らを支える現地 NGO を応援し、わかったことを自分たちの問題とつなげて考えることの大切さを、周りの人たちにも伝えようと活動している。

「ストリートチルドレン」と呼ばれる子どもたちは、まさに私たちの近視眼的な生き方がもたらした現実の、「犠牲者」だ。だからこそ、彼らの姿を通して未来を考える必要がある。そんな想いから、「ストリートチルドレンを考える会」は 30 年以上続いている。

日本で「ストリートチルドレン」という言葉が世に広まり始めたのは、1990 年代のことだ。当時、

アジア、アフリカ、ラテンアメリカの途上国と呼ばれる国々では都市化が進み、街の路上で働き暮らす子どもの姿が目立つようになっていた。その中には、家庭で虐待を受けたり、親に養育を放棄されたりして、生きる術を求めて路上へ飛び出した子どもが大勢いた。彼らは「ストリートチルドレン」と呼ばれるようになり、世界に約 1 億人いると推測された。

1990 年、私はメキシコの首都メキシコシティの路上で、初めてそんな子どもたちと出会った。それから毎年のように同じ街を訪ね、多くの子どもたちと話す機会を得てきた。なかでも特に印象に残っている子どものひとは、20 世紀も終わりに近づいた頃に知り合った少年、カルロスだ。8 歳前後だった少年は、小さく痩せっぽちであどけなかった。当時のメキシコシティの路上では、子どもたちの間で「麻薬」の代わりに、金属パイプ洗浄用の「アクティボ」と呼ばれる液体をティッシュに浸して嗅ぐことが流行っていた。そうしていると、何もかも忘れていい気分になれるからだ。カルロスも時々、酔っ払ったような虚な目をしていた。そして、子どもたちの



メキシコシティの街中にある公園で仲間と生活していたカルロス。1998 年頃。撮影／篠田有史。